

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

・指導内容や指導方法において特徴的工夫が行われている実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

長野県 松本市

○学校名

松本市立寿小学校

○学校のURL

http://www.city.matsumoto.nagano.jp/kodomo/gimukyoiku/shochu/elementary_school/e_kotobuki/kotobukitoppage.html

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】25学級（学年4～5学級）【特別支援学級】5学級【合計】30学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】855人（平成27年11月1日現在）
（内訳：1年生143人、2年生141人、3年生138人、4年生146人、5年生150人、6年生137人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成26・27年度 人権教育研究推進事業人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「明るい子ども（心）」 「強い子ども（体）」 「考える子ども（頭）」

【人権教育に関する目標】

「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができる人権感覚の育成

○人権教育に係る取組一口メモ

自治的な能力や自主的な態度を育て、より良い生活や人間関係を築く力を育む特別活動（学級活動）を通じた豊かな心の育成。

○人権教育にかかる取組の全体概要

○学校の教育活動すべてを通じて実践する。

- ・各教科、領域において、「人権感覚を磨く」「人権を機能させる」「人権そのものを学ぶ」を柱にし、目標を明確にした取組をする。
- ・「人権感覚を磨く」・・・主に国語、音楽、家庭科、外国語等
- ・「人権を機能させる」・・・主に算数、図画工作、体育等
- ・「人権そのものを学ぶ」・・・主に理科、社会、保健等

- 児童の自主性を尊重した指導方法の工夫。
 - ・ 児童理解を職員会議の柱にし、日々子供たちを丸ごととらえる職員研修の積み重ね。
 - ・ 子供たちの興味関心の見極めと実態把握をより綿密に行う。
 - ・ 子供たちの実態把握により、必要感ある課題設定を行う。
 - ・ 一つのことを友とともにやり遂げた達成感をしっかり自覚させ、次へのエネルギーとする。
- 人権教育推進に関する点検・評価アンケートの教職員・児童・保護者各層への実施及びその結果の分析活用。
 - ・ 各授業の振り返りで日々各児童に友のよさや、相手を大切にする行為について考えさせる。
 - ・ 各クラス1学期と2学期にQ Uを実施。結果から子供たち一人一人の捉え直し。
 - ・ 児童、教職員、保護者からの学校評価アンケートの実施（11月）。人権教育に関する項目のチェックと改善の方向検討。学校評議員会におけるアンケート（2月）を実施し、第三者から見た児童の様子を本年度の評価と実態把握に生かしていく。
- 家庭・地域との連携
 - ・ 日々の学校生活において地域の方々との交流を盛んに行う。学校応援団の方々との交流、地域の福祉施設の方々との交流。
 - ・ 児童の日々の様子で気になることは、家庭とすぐに連絡帳で連絡しあう。
 - ・ 学級懇談会の充実。
 - ・ 幼稚園、保育園児との交流。

3. 特色ある実践事例の内容

◇学級活動における折り合いをつける話し合い活動の取組

1. ◇ 取組のねらい

学級活動の目標には、「望ましい人間関係の形成」が示されており、学級活動の充実には、人権教育の深まりと深い関係がある。そこで、学級活動の折り合いをつける話し合い活動を切り込み口にし、願う子供の姿を決めだし、取り組むこととした。

◇ 目 的

学級会での話し合いや事後の活動を通して、自他のよさに気づき、互いに思いを伝え合い、認め合う心の育成。

2. 取組を始めたきっかけ

学校長が上記目的の内容を考え、指導者を探しているときに元文部省初等中等教育局視学官であった宮川八岐先生と出会い、宮川先生を中心講師として、特別活動を切り口に本校児童の人権感覚を育む研究をしていくことにした。

3. 取組の内容

以下のように研究テーマを決め、児童の実態より事例研究を通して仮説を立て、各児童が人権感覚を育む授業実践を行った。

(1) 研究テーマ

「自他のよさに気づき、互いに思いを伝え合い、認め合う子供」
～学級活動における折り合いをつける話し合い活動を通して～

(2) 研究における基本的な考え方

① 研究テーマ（「自他のよさに気づき、互いに認め合う子供」）について

(i) 自他のよさに気づくとは

- 自分自身を肯定的に見ることができ、自己理解を深める。
- 友達のよさにも目を向けることができる。
- 自分と異なる意見があることに気づく。
- 自分と異なる意見があることを知り、それを尊重する。

(ii) 互いに認め合うとは

- 相手のよさを発見し、理解する。
- 相手の立場に立ち、いろいろなものの見方や考えを認める。
- 一人一人の違いをとらえ、互いの存在を尊重する。

人権感覚を身に付けるためには、学級を始め、学校生活全体の中で、自分の大切さや他の人の大切さが認められていることを、子供たち自身が実感できるような状況を生み出すことが必要になる。学級活動においては、子供たちに自分が集団の一員としてかけがえのない存在であるということを実感し、一人の人間として大切にされているということを味わうことにより、自己や他者を尊重する感覚が芽生えると考える。

また、自分とは異なる意見でも耳を傾け、相手の立場になって考え、そのよさを認めることで、相手のよさに気づくだけでなく、気づけた自分の成長も感じることができるだろう。その体験を積み重ねることで、人権教育の目標である、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」に結びついていくと考える。

(iii) 折り合いをつけるとは

- 自分で考え、他の人の考えも聞き、さらに互いの意見が違ったときにも尊重し合い、自分もよく、みんなもよいといえることに合意点を見い出すこと。

本校では、「望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」ことを目標とする「学級活動」に着目し、特に「話し合い活動」を取り入れ、そこで折り合いをつけることを大切にすることが人権教育の目標に迫るために効果的であると考えた。

学級会での話し合い活動を通して、「異なる意見に折り合いをつけて集団決定し、決まったことに対して気持ちよく従い、協力し合う子供の姿を求めていくことで、互いの気持ちを理解し合い、学級の人間関係に信頼感をもち、よりよい関係を築いていくことができる」と考え、昨年度から実践授業を積み重ねてきた。

(3) 研究の具体

- ① 手立て1 学級の願いに向け、一人一人が明確な思いをもって話し合いに参加できるようにする。

仮
説

- ◇ 自分たちの生活やクラスをよりよくするために必要な事柄を、子供たちから吸い上げて議題とすることで、必要感をもって話し合いに参加できるだろう。
- ◇ 提案理由を明記した議題に対するアンケートを行うことで、学級の願いを感じながら、自分の思いや考えをもつことができ、自信をもって話し合いに参加できるだろう。
- ◇ 子供たちの生活に密着した必要感のある議題を話し合うことで、一人一人が思いや考えを明確にもち、意欲的に参加できるだろう。

- ② 手立て2 子供たちが思いを語り、自ら折り合いをつけられるような話し合いの場を設定する。

仮
説

- ◇ 出された思いを短い言葉で板書し可視化することで、互いの思いを共有することができ、友達の思いを受け止めることができるだろう。
- ◇ 出された意見やそこに込められた思い、心配な点や工夫点が、より分かりやすくなるよう板書を構造化することで、課題を解決しながら話し合おうとするだろう。
- ◇ 反対意見や少数意見を生かす場の設定 話し合いの柱①で出された反対意見や少数意見を、話し合いの柱②の工夫点を考える場面で生かすような

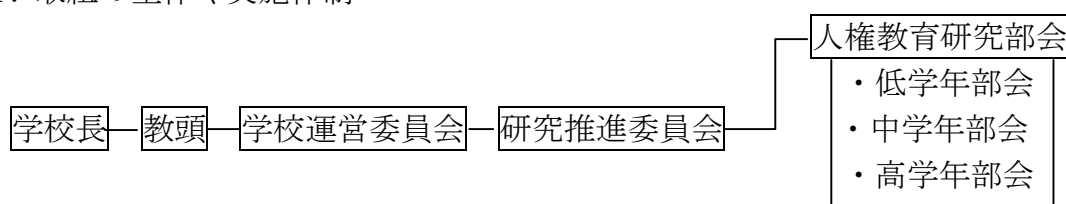
場の設定や教師の出を行う。

③手立て3 『話し合い～事後の活動』の一連のサイクルの中で、友や自分のよさを認め合うふり返しを行う。

仮
説

- ◇議題に対して自分がどのように考え、話し合いを通してどのように変わっていったか、また事後の活動を通して自分や友達に対してどう思ったかふり返ることで、自分の思いや気持ちの変容に気づき、友達のよさについて考えることができるだろう。
- ◇ふり返りの時間を確保したり、学級会コーナーに掲示して見合えるようにしたりすることで、互いの思いを共有し、友によさを伝えたり自分のよさを実感したりできるだろう。

4. 取組の主体や実施体制



上図の通り、取組の主体は人権教育研究部会であり、各低学年部会、中学年部会、高学年部会に分かれ、授業実践を通して取り組んでいった。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

1. 取組を実施する際に生じた課題

学級会活動の積み重ねから子供たちの変容（育ち）をどのようにとらえていったらよいのだろうか。

2. 課題に対する解決方法

各個の全体像をしっかりと捉えて、変容（育ち）を追っていく。

(1) 学級会を積み重ねることで相手の意見を共感的に受け止めていったF児の姿を通して

① 4月の様子

F児は特定の友達といることよりも、多くの友達に声をかけながら一緒にサッカーをやっている様子がふだんから見られ、決して運動は得意ではないが、意欲的である。学級生活の中では、学級全体へ給食前の整列や始業を伝える呼びかけなどを積極的に行うことができる。しかし、担任によく見てほしいという様子も見られ、担任の目の届かないところでは清掃で手を抜いてしまうこともある。また、家庭学習をやってこないことや忘れ物が多いこともあり、違う形で学級の注目を集めることも多い。

そんなF児の4月に行った、Q-Uの結果では、「友達やクラスから認められることがないと感じており、何かをするときに応援してもらうことや、協力してもらうことはない」と思っている。一方で、「クラスは明るく、協力し合

ったりまとまったりすることができるクラスで、クラスメイトから好かれている」という思いがあり、本人にとって居心地のいいクラスではある。

② 学級会の話合いの姿・ふり返りの様子

(i) 議題『はじめましてパーティー』の計画をたてよう

話し合いの中で、自分の意見を押し通そうとするF児

学級会のオリエンテーションを行い、学級会の目的・意義を理解し始めた子供たち。計画委員会を作り、教師が積極的に支援をしていく中

で学級会を自分たちの手で進めてみた。

C 1 フルーツバスケットがいい。みんなで楽しくできるから。

C 2 大根ぬきがいい。前のクラスで楽しかったから。

C 3 爆弾ゲームがいい。いつタイマーが鳴るか分からないから楽しい。

C 4 ハンカチ落としがいい。用意が簡単だから。

C 5 イスとりゲームがいい。交流ができるから。

F 児 みんなに提案です。「(提案理由が) みんなともっと仲よくなれるよう」になっているのに、楽しいのが出ている。

F 児 大根ぬきに反対です。危ないからやらない方がいい。だからロンドン橋がいい。

F 児 (ロンドン橋のつかまった人がする罰ゲームについて) 自己紹介をしたところで仲良くはなれない。

F 児 大根ぬきでルールを破った人は、抜けさせればいい。

子供たちは教師のまとめ方のアイディアを受けながら、2つの内容「ロンドン橋」「爆弾落とし(ハンカチ落としと爆弾ゲームを合体させた物)」に決め、3回の学級会を経てパーティーを実際に行うことができた。

< F児の学級会を通してのふり返り >

たくさん意見が出せてよかった。もっとみんな意見をだせばいいのに。

< F児のパーティーを行っての感想 >

K君がおもしろい人だということがわかってよかった。

< F児の姿への考察と教師のふり返り >

教師は、F児を「意欲的に発言する児童」と感じていた。実際に、学級会では提案理由を受けて真剣に考える様子が見られた。また、問題点に対する指摘も的確で、F児の発言によって児童が提案理由に立ち返る場面も多かった。

一方で、「自分の意見を通そう」「相手の意見の問題点を指摘してやろう」という思いがあることも徐々にわかってきた。また、Q-Uの結果を見ると、承認認知度が低く、「クラスのみんなから認められていない」と感じていることがわかった。

教師は、「論を戦わすことに終始するのではなく、<自分もよく、みんなもよいこと>を見いだす話合いの経験をすることで、相手の意見を共感的に受け止め、自分や友達のよさを認め合うことにつながる」と考え、F児の姿に迫っていきたいと考えた。

(ii) 議題「『S児君お別れパーティー』の計画をたてよう」

転出してしまいう児童への想いを寄せながら、話し合いに参加するF児

転出してしまいうことが決まった児童や学級の思い出になるパーティーをしようと、学級会が開かれることが決まった。

C 6 S児君がやりたい遊びに賛成。S児君のお別れ会なので。

F児 <ハンドサインで賛成>・・・賛成多数

C 7 S児君のやりたいのに賛成。S児君のお別れ会なので。

C 8 S児君はやりたいこと決まっているのですか。

S児 僕のやりたい遊びをやるというのはうれしいんだけど、話し合いの目当てが「全員で考えて、全員の思い出を作る」なので、みなさんはどうですか。

(あ～そうか)

C 9 殿様ゲームに反対。くじを作ったりするのに時間がかかる。くじで当たった人が変なことを言う。

F児 殿様ゲームに賛成。S児君を殿様にすればいい。無理に何かをやらせるのではなく、誰でもできるようなことをやらせればいい。

F児 僕は太根抜きゲームに反対です。ふれあいにならないし、けがしたり、ズボンズボンを脱がしたりになる。代わりに殿様ゲームや春夏秋冬がいい。

F児 椅子取りゲーム、ハンカチ落とし、新聞のりゲームに反対。理由は、目当ては「全員の思い出」だけど、S児君とまだふれあえていない人もいますと思うので、春夏秋冬や殿様ゲームで関わった方がいい。

S児 僕は春夏秋冬に反対。走ってしまつて危ない。代わりに殿様ゲームがいい。

F児 S児君のお別れ会なので、S児君のやりたいもの1つ、みんなのやりたいもの1つにしたらどうですか。

C 10 S児君のやりたいものに反対。全員の思い出を作るので、全員のやりたいものにした方がいい。(同意見が続く)

F児 みんなに質問で、S児君のお別れ会なのに、みんなのやりたいものにしたらただのレクになってしまう。そこはどうなんですか？

C 11 S児君のやりたいものの一つ。みんなのやりたいもの1つにしたらどうですか。

終始反対意見が先行し、お別れ会の目当てをめぐって行き詰まりとなり、話し合いは混沌としていった。また、賛成が集結していた「春夏秋冬」に反対しているのが、S児ということもあり、具体的に決められずにいた。決まったことは、「S児のやりたいこと1つ。みんなのやりたいことを1つ」。

次の時間に、子供たちは「S児が納得いく」にこだわり、「案を出す」所からやり直していった。まずは、S児の反対していた「春夏秋冬」が「走らない工夫ができそう」だという見通しのもの、S児が「工夫をすれば楽しくできそう」と考え方が変わり、折り合いを付けて決まっていた。次に、全く新しく出された「宝探し」に決まっていた。これは、前時一度も発言をしなかった児童が、「見つけた宝物は、S児にとっても、みんなにとっても宝物になる」と発言し、全員の児童の賛成のもと決めていくことができた。

＜F児の学級会を通してのふり返り＞

S児君のお別れ会なのに、みんなのやりたいことで決めたくない。

＜S児君のお別れ会を行っての感想＞

S児君と別れたくない。

＜F児の姿への考察と教師のふり返り＞

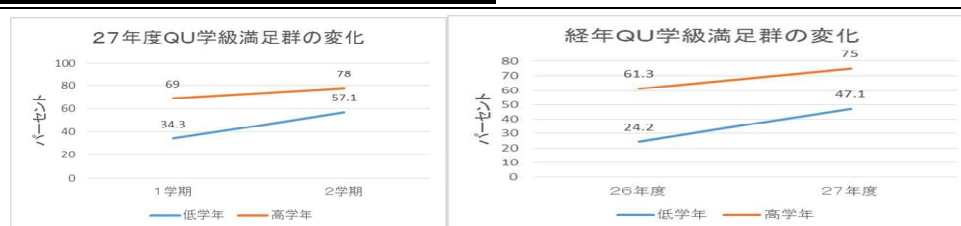
F児にとって、S児は大事な存在であった。それは、学級編成替えの中でできた、最初の友達だったからであろう。なので、F児がこの議題に寄せる思いは大きかった。話合いの中で、始めは「S児のやりたい遊び」をやればいい、と考えていたのだが、「みんなにとっての思い出」という目当てに立ち返り、「S児を中心にした内容」「S児と関われる内容」を大切に話合いの中での自分の考えを変化させている。それは、S児の「自分中心ではなく、みんなを大切にしたい」という思いに触れたからであろう。一方で、「S児のやりたい遊び」のこだわりもあるので、自分自身で「S児のやりたいもの一つ。みんなのやりたいもの一つ。」という折衷案を提示している。F児は「S児の反対意見」「みんなの思い」「自分の思い」が生きるような考えを出したかったからであろう。そんなF児の思いを受けて、C11児は賛成意見を述べている。教師は、F児の学びの姿こそ、相互理解の深まりの姿と考えた。

「S児が反対」を受けて、児童の話合いは行き詰まるのだが、児童は決めることをせずに、「反対意見を生かす」ことを真剣に考えていった。それは、F児に限らず、児童にとってS児は大切な存在で「こだわりのある議題」であったこと。「S児のみんなに寄せる思い」「F児のS児に寄せる思いの深まり」を感じ、「自分たちのF児、S児に寄せる思い」を自覚したからであろう。

その結果、「工夫をすることで反対を生かす」「新たな解決の視点を見いだす」が考え出され、児童はやる内容を決めていった。時間はかかってしまったが、F児は他者理解を深め、「折り合いの付け方」を経験的に学んでいった。

○ このような個々の姿を追い、個の変容をできる限り詳しく考察していった。

5. 実践事例の実績、実施による効果



上図は低高抽出学級のQU学級満足群の経年変化と本年度の変化である。共に学級満足度が上がっていることがわかる。本取組の成果と考えている。

6. 実践事例についての評価

1. 取組についての評価、及びそう評価する理由
 - ・ 全校で学級活動を切り込み口に取り組み、成果があった。各クラスのQ Uの結果や保護者の学校評価で9割が「友と協力して生活している」と答えている結果から。
2. 現在、実施に当たって課題と感じていること
 - ・ 一人残らず児童全員の人権感覚の育ちとその育ちの捉えを的確にしていくこと。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

松本市立寿小学校

特別活動（学級活動）に重点をおいた取り組みである。「話し合い活動」、とりわけ「異なる意見に折り合いをつける」こと、「反対意見や少数意見」への対応の在り方を通して、人権感覚を身に付けることを目指している。自分の意見を押し通そうとする児童の変化を、記録をもとにして具体的に紹介し、「はじめましてパーティー」「お別れパーティー」における話し合いの様子など、教師の積極的な支援が、丁寧に報告されている。互いに尊重したいと願いながら、意図せぬ対立に直面し、人権を軽視した言葉や行為に及ぶことも少なくない。具体的な場面で人間関係、信頼関係を維持、発展させていく取組として参考になる事例である。